

# 英語教師への提言:

## CEFR ベースの研究成果と英語リソースの活用

上村 俊彦

### Tips for EFL Professionals with Special Reference to CEFR-based Studies and English Resources

Toshihiko UEMURA

#### 概要/要旨

本稿では、文部科学省の『学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』で中学校英語の文法内容とされている to 不定詞関連の文法事項が、最近の CEFR 枠組みにおける研究でどのように位置づけられるかについて考察するとともに、英語教師が英文リーディングの指導する際に利用できる英語リソースの紹介とその活用のしかたについて論考した。

**キーワード** : CEFR, 学習指導要領, to 不定詞

### 1. はじめに

長崎県英語教育研究会（森浩司会長）から、2019 年 9 月 16 日に長与町立長与第二中学校で開催された「九州地区英語研究大会に伴う授業研究会」に出席し、講話する機会が与えられた。

当日は、英語教科書 *New Horizon English Course 3*<sup>1)</sup> の to 不定詞の学習を中心とした単元学習 (Unit 4 *To Our Future Generation*) が終了した中学 3 年生 16 名を対象に、担当教諭が準備した発展教材のグループ学習をする様子を参観した。その後、招聘者依頼演目「小中高大の連携、Reading 指導のあり方」の講話をおこなった。

本稿は、講演内容の一部を再構成したものである。

### 2. 視点

文部科学省によると、小学校、中学校、高等学校の新しい学習指導要領が、それぞれ、2020 年度、2021 年度、2022 年度からスタートすることになっている。同省は、学習指導要領改訂に関するスケジュール<sup>2)</sup>を提示するとともに、学習指導要領解説<sup>3), 4), 5)</sup>では学校種ごとの英語学習の実際を明らかにしている。

今回の学習指導要領の改訂は、「高大接続改革という、高等学校教育を含む初等中等教育改革と、大学教育改革、そして両者をつなぐ大学入学者選抜改革の一体的改革の中で実施される」ものであり、外国語教育については「小・中・高等学校一貫した学びを重視して外国語能力の向上を図る目標を設定し、目的や場面、状況などに応じて外国語でコミュ

ニケーションを図る力を着実に育成」することが求められている。（『高等学校学習指導要領の改訂のポイント』<sup>6)</sup>）

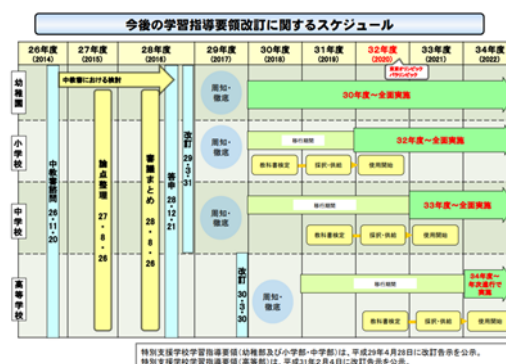


図 1. 今後の学習指導要領改訂に関するスケジュール<sup>2)</sup>

英語運用能力の向上の観点から、本稿では中学校英語の to 不定詞はどのように学習されるべきかについて、「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠 ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference of Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEFR))<sup>7)</sup>の近年の研究成果をもとに考察する。

### 3. to 不定詞

『中学校学習指導要領解説 外国語編』<sup>4)</sup>によると、中学生は次のような to 不定詞を含んだ文構造を学ぶ。(pp.40-43 下線筆者、以下同様。)

<主語+動詞+目的語>

*He tried to do his best.*

*My grandmother knows how to use the computer.*

<主語+動詞+間接目的語+直接目的語>

*I showed him how to send e-mail.*

<It+ be+動詞+(for~)+ to 不定詞>

*It is fun to travel new places.*

<主語+tell, want など+目的語+to 不定詞>

*Our teacher told us to go out and enjoy the break.*

また、中学生は to 不定詞の名詞、形容詞、副詞の用法<sup>4)</sup>を学習することになっている。(p.49)

<名詞としての用法>

*I want to drink water.*

*To learn a new language is difficult.*

<形容詞としての用法>

*Hiroshi needed something to drink.*

*The students had a lot of homework to do.*

<副詞としての用法>

*Takayuki went to the supermarket to buy some food.*

*My sister studies hard to enter college.*

*I am glad to see you.*

*We are excited to meet you again.*

上記の to 不定詞に関する文法事項の多くは、すでに現行の中学校3年生用英語教科書 *New Horizon English Course 3* に盛り込まれている。(pp.2-3)

*I am surprised to hear ...* Unit 3

*I know how to protect ...* Unit 4

*It is necessary for us to prepare ...* Unit 4

*I want you to pass ...* Unit 5

上記のような to 不定詞について、英語学習者がどこまで習熟すべきかについて検討するとき、CEFR をベースとした海外の研究成果は参考となる。

Cambridge University Press の English Grammar Profile<sup>8)</sup>は、Van Ek や Trim による CEFR に関する基礎研究 (*Breakthrough*<sup>9)</sup>, *Waystage*<sup>10)</sup>, *Threshold*<sup>11)</sup>, *Vantage*<sup>12)</sup>) や Cambridge Learner Corpus (CLC)に基づいている。

Hawkins and Filipovic<sup>13)</sup>は英語の文法素性のうちで CEFR 各レベルの弁別性を持つ評価基準となる素性 (critical features) を明らかにした。

English Grammar Profile で “infinitive” の検索をおこなうと、to 不定詞が各 CEFR レベルでどのように出現するか検証できる。(以下、本文中及び Appendix の用例には通し番号 (1)~(60)を付記。)

<English Profile 出力例>

A1

(1) *I like to go to the zoo*

(2) *I'd like to invite you on Sunday.*

A2

(3) *Please, bring something to drink.*

(4) *Please remember to bring your pyjamas.*

(5) *I love to cook.*

B1

(6) *Summer is the best time to visit Portland.*

(7) *It is important for everyone to attend this meeting.*

B2

(8) *... she told me not to be scared ...*

(9) *... young people at that age are not mature enough to decide by themselves ...*

C1

(10) *I would like to see it develop without any pollution...*

(11) *If it were to be published, the first issue ...*

英語学習者の能力を評価する Pearson Education, Inc. の Global Scale of English (GSE)<sup>14)</sup>で同様な検索をすると、CEFR レベルに GSE スコアが併記された用例が出力される。

<GSE 出力例>

B1(43-50)

(12) *I don't know how to change a wheel on a car.*

B1+(51-58)

(13) *Is it necessary for the children to stay?*

(14) *She knows where to go.*

British Council と European Association for Quality Language Services (EAQUALS) の *Core Inventory for General English*<sup>15)</sup>では、英文の事例がどの CEFR レベルでどのような談話機能を有しているかにより分類提示されている。(以下、CIGE。)  
CIGEによると、表現 “I'd like...”は A1 レベルであるが、勧誘 (invitation) の疑問文 “would you like...?”になると A2 レベルとなる。

<CIGE 出力例 1>

A1

(15) *I'd like a cup of coffee.*

(16) *I'd like to go home.*

A2

(17) *Would you like to come to my party?*

なお、to 不定詞が文頭に来る表現は、CIGE では話題の中断 (interrupting)、転換 (changing topic)、再開 (resuming a conversation) は B1 レベル、情報の要約、評価、表出 (synthesizing, evaluating, glossing information) や議論提起 (developing an argument) は B2 レベルとなる。

<CIGE 出力例 2>

B1

(32) *Sorry, to interrupt you but ...*

(35) To get back to what I was saying ...

B2

(40) To sum up, the government will need to cut spending for the next five years.

(41) To be fair, it was his own fault for parking where he shouldn't have.

(46) To get back to what I was saying ...

(50) To begin, I would like to introduce my colleagues.

(56) To be honest, I simply don't care.

ただし、上記の(35)と(46)は CIGE で 2 重掲載されている。(上記を含む CIGE 出力例については、本稿の Appendix を参照。)

New Horizon English Course 3 の 4 つの to 不定詞を含んだ文の CEFR レベルを上記の CEFR 研究成果をもとに検討すると、最初の 2 つは B1 レベル(各 1 例)となる。第 3 の“it+is+形容詞+for+(代)名詞+to 不定詞”は、B1 (1 例)、B2 (1 例)であることから、B1~B2 相当と推定できる。“want+to 不定詞”は、CIGE で A1 レベル (2 例)、A2 レベル (1 例) である。第 4 の“want+目的語+to 不定詞”の用例はないため、暫定的に A2 レベルとした。(表 1 参照。)

表 1. 中学校英語における to 不定詞

文	CEFR	関連の用例
<i>I am surprised <u>to hear</u> ...</i>	B1	B1(31)
<i>I know <u>how to protect</u> ...</i>	B1	B1(14)
<i>It is necessary for us <u>to prepare</u> ...</i>	B1 ~B2	B1+(13) B2(39)
<i>I want you <u>to pass</u> ...</i>	A2	A1(21, 22) A2(28)

CEFR では「言語使用者」としての英語学習者が実際のコミュニケーション活動を通じて必要となる言語能力に着眼していること<sup>15)</sup>に留意したい。(p.6) 表 1 の中学校英語の to 不定詞に関する文法事項を例に取ると、B1 または B2 レベルの英語の使用者 (English user) は各事項を「読んで」または「見て」わかる段階に留まらず、自身で「書いたり、話したり」してコミュニケーション活動ができるレベルの言語能力が期待される。

中学校や高等学校の英語教員が表 1 の to 不定詞を学習課題とする場合、学生の英語運用能力と上記の CEFR レベルとを勘案した指導プランを立てる必要がある。

ちなみに、CEFR 自立学習者レベルとされる B1~B2 を主たる利用者<sup>16)</sup>とする Murphy の Grammar in Use<sup>17)</sup>では、表 1 の to 不定詞の用法に対応した用例やその他の用例が詳細記述されている。

*I'm sorry to hear that ...* (Unit 63)

*We asked how to get to the station.* (Unit 52)

*It is hard to understand him.* (Unit 63)

*He doesn't want to know.* (Unit 53)

習熟度の高い(自立学習可能な)学習者は、Grammar in Use あるいは Azar and Hagen の Understanding and Using English Grammar<sup>18)</sup>などの学習用英文法ワークブックを入手して to 不定詞に関する文法事項を体系的に自修することも可能である。

習熟度が低い(学習支援が必要な)学習者には、支援者としての英語教師による積極的な学習支援が求められる。たとえば、中学校 3 年次担当の教師であれば、英語学習者が 2 年次に学んだ to 不定詞の 3 用法(副詞的、名詞的、形容詞的用法)<sup>19)</sup>を、コミュニケーション演習を通じて 3 年次の学習事項と関連づけるなどで当日の学習課題の理解の助けをする工夫が教師には求められる。(pp.2-3)

#### 4. 大学英語の視点

BBC や CNN などの英語放送、インターネット上の TED Talk や YouTube などの英語によるスピーチ映像など、今日では多様な英語によるテキスト、音声、映像が入手できる。このような英文、英語の音声や映像は「生きた」(authentic)英語素材として入手できる。大学の英語教育では、このような英語を教材として採用することで、大学生が「書き言葉」とともに「話し言葉」を学ぶことが可能となっている。表 2 は、筆者がこの数年間に担当したリーディングクラスで使った英語テキストをリストにしたものである。表 2 のような英語テキストを使う大学生は、自宅や授業クラスで英米のテレビ番組を教材として学ぶことができる。

表 2. 大学英語教材例

	<i>Life</i> <sup>20)</sup>	<i>Speakout</i> <sup>21)</sup>	<i>Unlock</i> <sup>22)</sup>
CEFR	B1	B1+~B2+	B1
映像教材提供	National Geographic Learning	BBC	Discovery Education
オンラインリソース	MyELT	MyEnglishLab	Cambridge Learning Management System (CLMS)

以下は、Speakout Upper Intermediate の Unit 1 DVD 映像教材の英文スクリプトからの抜粋である。(下線部、筆者。)<Speakout 抜粋>

P: *At number 38 it's husky sledding. I've come to Saariselkä in Finland for a test drive. Absolutely beautiful here, the snow is just like ... it's got*

*little bits of crystal all over it and you can really take it in because the dogs are doing all the hard work.*

HC: *Just the sound of the snow and the dogs panting with all the silence around. I think that would be fantastic.*

AT: *Totally silent apart from the sound of the sled and the dogs' paws. Incredible.*

基本的な学校英文法では「生の英語」が理解できない場合もある。上記のBBC番組の冒頭ナレーション部には、放送英語<sup>23)</sup>でよく見られる主部を欠いた叙述部のみの表現が認められる。(p.6, p.31) 欠落部分は、統語論上、主語 *it* または *there* と叙述動詞 *is* の省略<sup>24)</sup>と考えられる。(11.50, 12.48)

映像による情報が欠落部を補っているためか、受講生はナレーションに違和感を待たずに受け止めているようである。ちなみに、クラス学習では発話中の語の中断、言い直し、言い間違いなどに拘泥せず、できるだけ多様な英語を受講生が聞いて慣れる演習に時間を費やしている。同時に自習課題として、学生PCまたはスマートフォンに使用テキストのオンラインサイトで提供される英語音声(英文テキストの音声ファイル)をダウンロードさせ、複数回再生してリスニングすることを課している。なお、教室では前回学習部分のリスニング小テストをおこなっている。

「Reading 指導」に音読を取り入れる大学英語教員も多い。卯城祐司<sup>25)</sup>は、「音読という活動は、直接的には、書かれた単語を音声化できるという学習者の能力を育て(中略)間接的には、それが黙読における内容理解にもつながる」、「音読は、音韻ループ内の構音リハーサル過程を発生という形で顕在化すること」と述べている。

同掲書によると、音読は文字の視覚的認識、英語の音韻処理、意味理解のプロセスを踏む。(pp.64-66) 換言すると、英文テキストの音読とは、音読者が各センテンスの統語構文やテキスト全体の構造をどのように理解したかを音声化して提示するパフォーマンスである。ちなみに、同掲書に言及がある英語教師の音読の採点基準に関する先行研究では、英文を適切な意味単位で区切って読む「文節の区切り」には有意な評価者間信頼性がある。(p.71)

Nation<sup>26)</sup>では、英語学習者が多読(extensive reading)モードで読んだ英文の内容を理解できるためには、英文テキストが98%以上の既知の語彙で構成されていることが好ましいと指摘している。なお、同掲書では英語学習者が実際に使用する英文テキストは、語彙レベルや文法事項を制限した習熟度別リーダー(graded reader、以下、GR)になることを想定している。(p.51) 同様に、SSS 英語多読研究会<sup>27)</sup>の古川昭夫<sup>28)</sup>は、「文章を分析しないで大意を把握する読書法」にGRを使うことを推奨している。

卯城祐司<sup>25)</sup>は先行研究の考察を通じて、GR 英文テキストの音読は、聞き慣れない語彙やその文法情報を繰り返して聴覚呈示することで、音読者の語彙(文法)獲得にも寄与する安定した音韻表象をもたらすと考えている。(pp.72-74)

CEFR 準拠のグレードごとに、使用できる語彙、文法事項に制限が設けられた GR が多くの出版社から刊行されている。Macmillan Education の *Macmillan Readers*、Oxford University Press の *Bookworms*、Pearson English, Inc. の *Pearson English Graded Readers* は、GR グレードごとに利用可能な語彙の数と文法項目とを記述したシラバス<sup>29)</sup><sup>30)</sup><sup>31)</sup>を公開している。英語教師が GR を自習やクラス課題として英語学習者に課す際には、事前に参照すべきである。

ちなみに、Pearson English, Inc. の *Grading of Language* では、Level 3 1200 headwords A2 の Verbs の下に、“Infinitives after permitting verbs and adjectives” がリストされている。英語学習者が同出版社の A2 レベルの GR テキストを読むと、「動詞+to 不定詞(例 *afford to buy*)」または「形容詞+to 不定詞(例 *safe to drink*)」の実例に接する可能性が高い。

英語学習者が GR テキストを学習する際、GR の録音教材(音声 CD または MP3 ファイル)を使って音読練習することが好ましい。「動詞+to 不定詞」または「形容詞+to 不定詞」部が、同一の強弱強勢(stress)句であることを目と耳で学ぶことができる。また、録音教材を活用したシャドイング(shadowing)<sup>32)</sup>を英語学習者が習慣化できたら、当該文法事項を内在化させる近道(shortcut)となるだろう。(pp. 9-19, pp.123-126)

#### 4. 終わりに

本稿では最近の CEFR 研究の視点から中学校英語で学ぶ to 不定詞の用法や語法について考察するとともに、英語学習者の英語運用能力に資する英文テキストのリーディング学習支援のあり方について論考した。先行研究による検証によって、中学校英語の言語内容であっても、英語運用能力上 CEFR レベルは同一ではないことを明らかにした。また、英文テキストの音読学習、簡単に入手できる身の回りの「生きた英語」教材の活用を通じて、英語学習者が英語の受容能力と発信能力とを伸ばすための英語学習の方策について提言をおこなった。

(2019.10.25 投稿, 2019.10.28 受理)

#### 文 献

(URL 情報は 2019 年 10 月 25 日現在。)

- 1) 笹島準一, 関典明, 明石達彦他著: “*New Horizon English Course 3*,” 東京書籍株式会社, 2019.
- 2) 文部科学省: 「今後の学習指導要領改訂に関するスケジュール」, 2019a.  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/02/08/1384661\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/02/08/1384661_001.pdf)
- 3) 文部科学省: 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説 外

- 国語活動・外国語編』, 2019b.  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_011.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf)
- 4) 文部科学省:『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』, 2019c.  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018\\_010.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_010.pdf)
- 5) 文部科学省:『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編・英語編』, 2019d.  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1407073\\_09\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1407073_09_1_1.pdf)
- 6) 文部科学省:「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」, 2019e  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/02/19/1384661\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/02/19/1384661_002.pdf)
- 7) British Council:「CEFR ヨーロッパ言語共通参照枠」  
<https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/ees-cefr-jp.pdf>
- 8) Cambridge University Press:“English Grammar Profile,”  
<http://www.englishprofile.org/english-grammar-profile/egp-online>
- 9) Trim, J.L.M.:“Breakthrough,” Council of Europe/ Cambridge University Press, 2009.  
<http://www.englishprofile.org>
- 10) Van, Ek, J.A. and Trim, J.L.M.:“Waystage,” Council of Europe/ Cambridge University Press, 1990a.
- 11) Van, Ek, J.A. and Trim, J.L.M.:“Threshold,” Council of Europe/ Cambridge University Press, 1990b.
- 12) Van, Ek, J.A. and Trim, J.L.M.:“Vantage,” Council of Europe/ Cambridge University Press, 2001.
- 13) Hawkins, J. A, and Filipovic, L.:“EnglishProfile Studies 1: Criterial Features in L2 English: Specifying the Reference Levels of the Common European Frame,” Cambridge University Press, 2012, p.9, p.11.
- 14) Pearson Education Inc.:“GSE Teacher Toolkit,”  
<https://www.english.com/gse/teacher-toolkit/user/lo>
- 15) British Council and EAQUALS:“Core Inventory for General English,” 2010.  
<https://englishagenda.britishcouncil.org/continuing-professional-development/cpd-teacher-trainers/british-council-eaquals-core-inventory-general-english>
- 16) Cambridge English:“Grammar in Use Intermediate Fourth Edition,” Cambridge University Press.  
<https://www.cambridge.org/jp/cambridgenglish/catalog/grammar-vocabulary-and-pronunciation/grammar-use-intermediate-4th-edition>
- 17) Murphy, R. with Smalzer, W. R., and Chapple, J.:“American English Grammar in Use Intermediate Fourth Edition,” Cambridge University Press, 2018.
- 18) Azar, B.S. and Hagen, S.A.:“Understanding and Using English Grammar, Fifth Edition,” Pearson Education, 2017.
- 19) 笠島準一, 関典明, 明石達彦他著:“New Horizon English Course 2,” 東京書籍株式会社, 2019.
- 20) Dummett, P., Hughes, J. and Stephenson, H.:“Life 4 Student Book,” Cengage Learning, 2015.
- 21) Eales, F. and Oakes, S.:“Speakout Upper Intermediate Students’ Book Second Edition,” Pearson Education Ltd., 2015.
- 22) Ostrowska, S., Jordan, N. and Sowton, C.:“Unlock Level 3 Listening, Speaking & Critical Thinking Student’s Book,” Second Edition, Cambridge University Press, 2019.
- 23) Burchfield, R.:“The Spoken Word: A BBC Guide,” Oxford University Press, 1982.
- 24) Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. et al.:“A Comprehensive Grammar of the English Language,” Longman Group Ltd., 1985.
- 25) 卯城祐司,『英語リーディングの科学』, 研究社, 2009.
- 26) Nation, I.S.P.:“Teaching ESL/EFL Reading and Writing,” Routledge, 2009.
- 27) SSS 英語多読研究会:「めざせ 100 万語! 多読で学ぶ SSS 英語学習法」, 2016.  
<https://www.seg.co.jp/sss/>
- 28) 古川昭夫:「多読で英語に親しみませんか?」, 2008.  
<https://www.seg.co.jp/sss/learning/>
- 29) Macmillan Education:“Using Graded Readers in Classroom,” pp.41-42.  
<http://www.macmillanreaders.com/wp-content/uploads/2010/07/UGRIC-web-2014-Macmillan.pdf>
- 30) Oxford University Press:“Bookworms and Dominoes Syllabus,”  
[https://www.oupjapan.co.jp/sites/default/files/contents/gradedreaders/media/dominoes-bookworms\\_syllabus.pdf](https://www.oupjapan.co.jp/sites/default/files/contents/gradedreaders/media/dominoes-bookworms_syllabus.pdf)
- 31) Pearson English:“Pearson English Reading Grading of Language,”  
[https://s3-us-west-2.amazonaws.com/prodengcom/readers/readers/documents/PEGR\\_Grading-of-language.pdf](https://s3-us-west-2.amazonaws.com/prodengcom/readers/readers/documents/PEGR_Grading-of-language.pdf)
- 32) Hamada, Y.:“Teaching EFL Learners Shadowing for Listening,” Routledge, 2017.

## Appendix

以下は、Core Inventory for General English (CIGE) の Appendix E Exponents for Language Content 用例で、to 不定詞が含まれているものを CEFR A1～C1 の順に記載したものである。

A1

- (18) This is Mary. Pleased to meet you.
- (19) We are going to make a pizza this evening.
- (20) I'd like to go home.
- (21) These people want to talk to us.
- (22) I want to buy a phone.

A2

- (23) *Would you like to come to my party?*  
(24) *We have to get home. Grandad is waiting for us.*  
(25) *I go jogging to get fit.*  
(26) *They are going to Scotland to see the Loch Ness monster.*  
(27) *I went to the post office to buy stamps.*  
(28) *She wants to go home now.*  
(29) *I forgot to lock the door.*  
(30) *They hope to arrive at 9 o'clock.*

B1

- (31) *I'm sorry to hear that.*  
(32) *Sorry, to interrupt you but ...*  
(33) *Sorry, I just wanted to say ...*  
(34) *By the way, there's something else I wanted to tell you.*  
(35)\* *To get back to what I was saying ...*  
(36) *I didn't want to wake him from his deep sleep.*  
(37) *We couldn't get to work because of the heavy snow.*

B2

- (38) *I hope to get a job in Australia next year.*  
(39) *It's impossible to get him out of bed before 10 o'clock.*  
(40) *To sum up, the government will need to cut spending for the next five years.*  
(41) *To be fair, it was his own fault for parking where he shouldn't have.*  
(42) *To begin with it's a bigger problem than you think.*  
(43) *As far as I am concerned this has nothing to do with the issue.*  
(44) *Are you trying to say you don't want to go out with me anymore?*  
(45) *This has nothing to do with what we are talking about but ...*  
(46) \* *To get back to what I was saying.*  
(47) *We don't have time to go into that matter right now.*  
(48) *Subsequently, he went on to be one of our best salesmen.*  
(49) *I would like to tell you more. However, that is as much as I am allowed to reveal at this time.*  
(50) *To begin, I would like to introduce my colleagues.*  
(51) *To help pay for his keep and to help his family. Andrew, who was still only 15 years old, began working ten-hour days at a Kensington hotel washing dishes and cleaning the kitchen. ...*  
(52) *History tended to be uninteresting when I was at school.*  
(53) *Feel free to use it whenever you want.*

C1

- (54) *There's bound to be trouble at the meeting.*  
(55) *It's supposed to be good.*  
(56) *To be honest, I simply don't care.*

(57) *I have to admit that ...*

(58) *There is no evidence to show that ...*

(59) *He's going to be given an award.*

(60) *He ought to be sacked for behavior like that.*

\*CIGE の Appendix E の B1 と B2 の用例として二重掲載されている。

### Abstract

This paper is based on a talk for and a discussion with English professionals who teach English at junior or senior high schools. After a brief examination of the next Junior High School Course of Study, Foreign Language by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), the author directed English professionals' attention to recent CEFR-based research findings, which suggest not all uses of *to*-infinitives taught in junior high school classroom correspond to any single CEFR level. Also discussed in detail were how to use graded readers as an extensive reading material, and how to use authentic English videos to foster students' better communicative skills.